

SEFI レポート Vol.1

シンポジウム『うなぎの未来V ～行政はウナギを救えるか～』

開催日時 2017年7月22日 10:00～17:30

開催場所 東京大学 弥生講堂一条ホール

東京大学で『うなぎの未来V ～行政はウナギを救えるか～』というシンポジウムが開催されました。環境省・国交省・水産庁を始め、漁業関係者やゼネコン関係者も交えて真剣な議論が交わされ、“うなぎを食べ続けるには自分たちの手で未来を作り出さなければならない”という意識を改めて抱くことになりました。

最初に、日本大学の塚本勝巳教授が基調講演を行い、「東アジア鰻学会」の設立とその会長就任を発表しました。自然科学・社会科学・人文科学を統合し、うなぎを食べることが好きな人、捕ることに興味がある人、生業を立てている人、研究している人が集うサロンにして「うなぎ千年王国」を目指すことを宣言されました。

環境省の有山義昭氏は、うなぎが減った要因として①海洋環境の変化、②乱獲、③河川・沿岸環境の変化の3つを挙げ、生息地保全の観点からモニタリングを続けると発表しました。

国交省河川環境課の奥田晃久氏は、治水・利水を目的に造られた河川構造物がうなぎの川上りと川下りを邪魔してきたとし、河川が本来有している生物の生息環境や多様な景観を保全・創出し、地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮し、治水・利水機能と環境機能を両立させた河川管理を行う「多自然川づくり」を平成18年から続けていると発表しました。年々、コンクリート護岸による直線水路ではなく、水際の変化に富んだ河川構造にする例が増えているそうです。

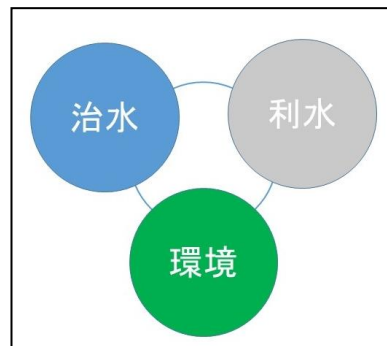
水産庁の保科正樹氏は、うなぎ養殖場の池入れ量の管理によって資源管理を行うと発表しました。

水産研究・教育機構の田中秀樹氏からは、完全養殖の難しさがエサと飼育方法にあると説明し、2013年から行っている「マリンスノー飼育」で大学や民間企業と協力して研究を続けていると発表されました。

また、鹿児島県水産振興課から鹿児島における養殖業関係者と漁業関係者とが協力して乱獲を制限する取り組みが発表され、鹿児島建設からは「STK ネット」という独自開発した網を使って石倉カゴや魚道を川に設置し天然うなぎの保護活動を行っていることが発表されました。



▲『うなぎの未来V』で基調講演する東アジア鰻学会会長の塚本勝巳教授



▲これからの河川工事は、治水・利水に加えて環境も考えなければならない

(小重忠司)